2023年8月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第559号

地方小出版 情報誌 アクセス

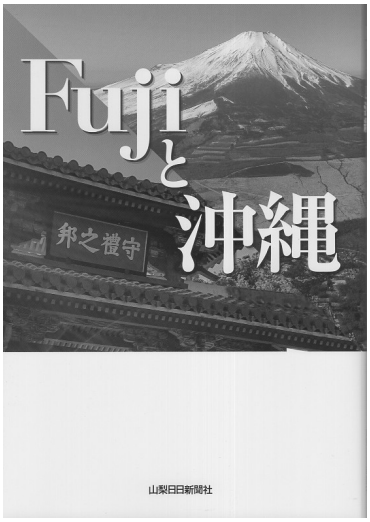
毎月1回　1日発行
購読料　定価150円
（本体136円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター
編集　アクセス編集委員会
〒162-0836　東京都新宿区南町20
TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

山梨から考える沖縄と日本の戦後
―『Fujiと沖縄』を発刊して―

文／山梨日日新聞社・前島文彦（「Fujiと沖縄」取材班）

山梨日日新聞社は6月、かつて山梨など本土各地に存在した米軍基地の歴史と基地周辺の事件・事故の実態、米軍基地を巡る現代的な課題を伝える書籍『Fujiと沖縄』を刊行しました。この本は沖縄の日本復帰50年に合わせ、昨年1～6月に山梨日日新聞に掲載した連載企画「Fujiと沖縄　本土復帰50年」を書籍化したものです。連載では被害者本人や遺族、公的文書に基づき、米兵による本土での被害の実態を伝えるとともに、本土での反基地運動の拡大などを背景に沖縄への基地集中が進んだ歴史を詳述しました。企画は高く評価され、第22回石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞公共奉仕部門大賞、第28回平和・協同ジャーナリスト基金賞、第5回むのたけじ地域・民衆ジャーナリズム賞優秀賞を受賞しています。本書は連載を基に「プロローグ」「第1部　米軍がいた11年」「第2部　かすむ進駐の記憶」「第3部　米軍 今も隣に」「第4部　『痛み』分かち合いは」「第5部　それぞれの5・15」「第6部　継ぐ未来のために」「エピローグ」で構成しています。



『Fujiと沖縄』山梨日日新聞社編・刊／A5判・本体価格：2000円／ISBN978-4-89710-317-4

「負の歴史」継承へ

連載の動機は、米軍基地を巡る地域の歴史が風化しつつあることへの地元紙としての問題意識でした。山梨県側の富士山の麓には、北富士演習場という広大な演習場があります。日本陸軍が1936年から38年にかけて民公有地を買収して開設し、現在は陸上自衛隊北富士駐屯地が管理しています。占領期に北富士演習場を接収した米軍は、基地「キャンプ・マックネア」を置きました。戦争が終わった1945年から56年までの11年にわたって米兵が駐留し、演習場周辺では地元住民が被害に遭う事件や事故が相次ぎました。また、米兵を相手にする女性が地域に流入したことで風紀や治安も悪化。しかし、こうした経緯については「負の歴史」と見なされ、継承されていません。また、基地にいた米海兵隊は米国の統治下にあった沖縄に移駐していますが、当時を知る人が少なくなり、こうした記憶も薄れつつあります。基地問題に苦しむ沖縄への本土の共感力が弱まる中で、地元紙としてこうした事実を記録する必要性を痛感し、日本復帰50年というタイミングで連載しました。

取材の手掛かりとなったのは、全国調達庁職員労働組合が1958年に行った米軍による事件と事故の全国実態調査でした。調査票の写しを所有する大阪大学の藤目ゆき教授の協力を仰ぎ、内容を確認。調査票には被害者の住所、氏名、年齢といった個人情報のみならず、被害時の状況やその後の苦しい生活がつづられていました。取材はきわめて難航しました。調査票に記述された住所に赴いても家がないことはしばしばあり、市町村合併で住所特定が困難なケースもありました。被害に遭った本人はもちろん、遺族にたどり着くことさえできない状況でした。また、事件から70年以上がたっていても遺族にとっては触れられたくない傷であり、取材を固辞する人も少なくありませんでした。本人や遺族の元を何度も訪ね、企画の意図を説明して協力を求める中で、取材に協力してくれる人も現れました。本書ではこうした貴重な証言をすべて実名で記しています。

難航する取材、貴重な証言

このうち、男性の一人は1949年7月、山梨県忍野村の自宅前で米軍の大型車両にはねられました。当時4歳。病院に運ばれましたが、この事故で男性は下半身が不自由になりました。全国調達庁職員労働組合の資料には、事故の状況やその後の家族の生活が記されています。「一切を犠牲にして看病しましたが、胸部以下の全神経を喪失」「母親は家事を犠牲にして食事のことから大小便まで人工的に努力」。一方で、賠償責任を負うべき米国や米軍、米兵個人から補償は一切ありませんでした。連合国軍総司令部（GHQ）は、米兵が関与した事件や事故について賠償金の支払いを拒絶。男性と家族には国と村からわずかな見舞金が支給され

たのみでした。男性は「米軍が北富士に駐留しなければ」と語りました。

北富士演習場には数千人規模の米兵が駐留していたとされます。いわゆる「基地経済」と呼ばれる米軍依存の経済も循環を始めます。地域住民はビヤホールやジャズバーを開き、米兵が落とすドル札を頼みに。富士山の溶岩に覆われ、耕作もままならない寒村は降って湧いたような好景気に見舞われました。さらに、米兵を相手にする女性が流入し、一般の民家でも女性たちに部屋を貸し、歓楽街となっていきました。戦後の混乱期でもあり、占領への諦念が地域にありましたが、サンフランシスコ講和条約の発効により反発の声も徐々に高まっていきます。入会地である北富士演習場への立ち入りが制限されたことや、核搭載可能なロケット砲「オネスト・ジョン」の発射実験が行われるに至り、地元の反対運動が拡大。米海兵隊の沖縄への移駐につながっていきます。

本書では山梨だけではなく、関東近県を中心に本土の米軍基地の歴史も記述しています。1950年7月には、現在の茨城県ひたちなか市にある阿字ヶ浦海水浴場で遊んでいた小学3年生の女子児童が、水戸対地射爆撃場から飛び立った米軍機の機銃掃射によって亡くなる痛ましい出来事がありました。その女子児童の姉の証言も収録しました。また、神奈川県茅ヶ崎市にあった米軍の演習場「チガサキ・ビーチ」を巡る地元の反対運動の状況も記録しています。サザンオールスターズの楽曲にも登場する烏帽子岩は、米軍の砲撃訓練の「的」となっていました。漁業や日常生活への影響を懸念する市民の反発を受け、チガサキ・ビーチは1959年に返還されました。

米軍が設けた基地「キャンプ・マックネア」の門付近。現在の北富士演習場梨ヶ原廠舎付近とみられる。提供：山梨日日新聞社

公開された沖縄県道104号越え実弾射撃訓練の移転演習＝山梨県・北富士演習場（2011年11月）。提供：山梨日日新聞社

今もなお 終らない「戦後」

全国調達庁職員労働組合とは別に、調達庁も占領軍が関与した事件と事故について実態調査をしていました。防衛省への情報公開請求も行い、沖縄を除く46都道府県で9352人が被害に遭い、国が17億4000万円を支出していたことも明らかにしました。沖縄への基地集中を表す言葉として「0.6%の国土面積に7割の米軍基地」があります。その「原形」は1950年代に形成されたといわれます。1950年に勃発した朝鮮戦争以後、米国は本土での反米軍基地運動が反米運動につながる可能性を懸念し、直接統治していた沖縄に基地を集中させたとの見方があります。そうであるならば沖縄の現状はまさに本土の問題と言えるでしょう。

しかし、米軍基地を巡る本土から沖縄への視線は冷淡なものです。本土では米軍基地がある地域が局所的になり、基地問題にリアリティーを感じにくくなっていることが背景にあるのでしょう。沖縄で米軍基地問題に関わる人たちを誹謗中傷する街頭での発言や交流サイト（SNS）への投稿が問題となっています。また、基地問題に関する知識が十分でないために誤った情報を発信するだけではなく、意図的に憎悪や差別を扇動する「ヘイトスピーチ」もあります。このヘイトスピーチに抗う沖縄県民の動きを紹介するとともに、沖縄の日本復帰50年となった昨年5月15日の前後に、山梨と沖縄の双方にゆかりがある人物に取材するなどして、問題が地続きのものであることを報じました。

本土の米軍基地も過去のものとは言えません。米軍は北富士演習場と静岡県の東富士演習場を合わせ、「富士演習場」として使用し、沖縄県道104号越え実弾射撃訓練の移転演習を行っています。また、富士山麓では、米軍機の低空飛行など実践的な訓練が行われており、騒音や飛行高度に関する住民生活への影響もあります。さらに日

米地位協定では、公務中の米兵や米軍属による事件や事故について米国側の一次裁判権を認めており、米軍は航空法の一部規定など国内法の遵守も免除されている状況があります。全国知事会は日米地位協定の抜本的な改定を求めていますが、実現していません。日米地位協定は本土や沖縄の区別なく、すべての国民に関わる問題であることも本書では伝えています。

一人でも多くの読者へ

書籍化に当たっては、連載の目指した問題提起がよりはっきりと浮かび上がり、全体像が伝わるよう、演習場周辺の写真や図などを口絵に、沖縄と北富士演習場の主な出来事をまとめた年表を「プロローグ」の前に置くなど構成を工夫しました。また、カバーデザインには北富士演習場のある山梨県側からの富士山と、沖縄を象徴する「首里城公園　守礼門」の写真を使用。物理的には遠く離れた二つの地を結ぶ戦後からの問題点を一目で伝えられるものにするため、試行錯誤しながら固めました。A5判というサイズは読み物としてはやや大判ですが、連載時の写真をできるだけ生かせるよう、あえて大きめのサイズを選びました。

本文は、連載紙面の雰囲気を生かしつつ、一方でじっくりと考えてもらえるよすがとなり、連載の完全版にして永久保存版となるよう心掛けました。前出の藤目教授をはじめとした識者のコメントや著名人へのインタビュー記事、可能な限り取りまとめた全国調達庁職員労働組合の実態調査ももれなく収載しています。折しも連載年は山梨日日新聞創刊150周年に当たり、各方面の協力のもと、意義ある連載を新聞社の使命として書籍化できたことは幸いです。なお、本書奥付の発行日は、沖縄「慰霊の日」の6月23日としました。

発刊後、地元・山梨の書店では平積み・面陳で展開してくれる書店も多く、POP等の使用を含め販売に協力してもらっています。そうした店頭を取材して、さらに一人でも多くの読者に手渡せるよう、新聞社ならではの周知も行っています。おかげさまで、初回配本以降コンスタントに追加注文をいただいています。

＊

（まえしま　ふみひこ・山梨日日新聞社　「Fujiと沖縄」取材班）

新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

『下野の中世社会 －現代との比較で知るその特質』●荒川善夫 著

「歴史とは現在と過去との絶え間ない対話である」との人口に膾炙された名言がある。一方で、歴史学という学問はどんなに客観的な立場に徹しようとも、現代社会に生きる人間の思考回路から逸脱することは不可能であることも我々は知っている。そうした限界を踏まえて我々は過去から何かを学ぼうと試行錯誤する。本書は日本の中世社会、とくに下野国を例に現代との比較を試みている。地方分権・自力救済・宗教・多様性・名前などのテーマから中世社会の特質を考える。

著書はすでに専門書を何冊か上梓しており、史料の取り扱いも手堅い。中世法として「宇都宮家弘安式条」「結城氏新法度」を取り上げているが、気になったのは、中世社会の特質を法律や現象面だけを取り上げ、この部分は現代と相違している、または相似している、というように仕分け作業をしている。処罰の対象として「博奕」「喧嘩・口論」などに現代社会との共通性を見出すが、仕分けしてしまうと、逆にその社会の本質が見えにくくなってしまう恐れがあるのではなかろうか。中世社会と現代社会とで一見共通性が見いだせる法律や現象も、その根っこは全く異なるところから派生していることだってありうると思う。文化を比較する際、往々にして相違性より共通性を見出すほうが難しい。歴史事実の誤認に陥る危険性があることも著者は当然ご承知だと思う。が、逆に、過去を現代・未来へと役立てたいとの思いが強いことも伝わってくる。（Ｉ）

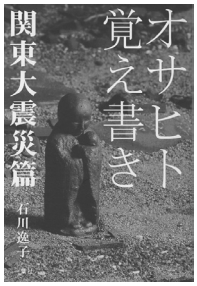
◆ 2500円・四六判・262頁・**下野新聞社**・栃木・202306刊・ISBN9784882868514

『いのちの俳句鑑賞』●橋本喜夫 著

俳句は何を詠むべきか？風景や四季の移ろいを詠む、家族を詠む、愛を詠む、社会を詠むなど俳人それぞれ答えは無数にあるだろう。著者はそれについて、芭蕉の「造花にかえる」や虚子の「花鳥諷詠」、さらには森澄雄や飯田龍太といった現代俳人を参照しながら「一番肝要なテーマは何かと問われたら、『命（いのち）を詠むもの』としか答えが見つからないのである」と言う。そこには医師としての著者が常に生命や健康に携わっているということが大きい。本書は著者が主宰する、北海道旭川を拠点とする俳誌『雪華』に連載された俳句鑑賞文をもとにしているが、一見、生命や生死とは直接関係のないように思える〈或る闇は蟲の形をして哭けり〉（河原枇杷男）といった観念的といっていい句もある。しかしそのような句も結局は根底では「生命」と繋がっている、というのが著者の考えである。あえて「いのち」をテーマに鑑賞句を選ぶのではなく、あらゆる俳句作品に「いのち」を見出していく、というのが本書における著者の基本姿勢である、ということなのである。（T）

◆ 1800円・四六判・336頁・**書肆アルス**・東京・202306刊・ISBN9784907078416

『オサヒト覚え書き　関東大震災篇』●石川逸子 著

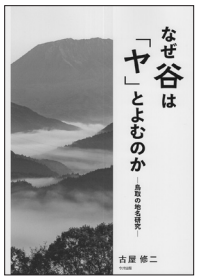


明治天皇の父・孝明天皇（オサヒト）の亡霊が導く［反帝ドキュメンタリー・ノベル］シリーズの第３弾！　詩人として著名な作者の石川逸子は、このクニのモラルハザードの元凶・天皇その人を狂言回しに、意図的に覆い隠して無かったことにしたい数多の加害の歴史的事実に読者を直面させ、蔓延している反動的で差別的、閉塞的な現在の危うい大勢＝汚染された空気に足元から風穴を開けようと試みている。

その第３弾の本書は、あの関東大震災時の朝鮮人、中国人、そして日本人でも辺縁・下層の民や反体制運動家などへの大虐殺がテーマ。このジェノサイドの根本的な原因と実態を、虐殺の引き金となった朝鮮での３・１独立運動を起点に、詩人ならではの鋭敏な視点から真っ直ぐに追跡する。埋もれたものをはじめ数かずの資料を掘り起こして駆使し、ところどころに迫真の詩や碑文等を散りばめながら、どこまでも殺される側から、平易に、揺るぎない事実をもとに、犠牲者たちを衷心から悼む。　関東大震災から今年でちょうど100年。まる１世紀が経ったというのに、相変わらず加害に向き合おうとしないこのクニの政府と、その破廉恥な政府を支え隷属する多くの人びと。「……大震災時になされた政府、軍隊、そして民衆も加担した凄まじい大虐殺の犠牲者について、未だこの国は、調査・反省・謝罪・補償も一切していません。そのことが、現在のこの国の暴走を許しているのではないでしょうか」――著者の「あとがき」の言葉が胸を刺す。（和）

◆ 2000円・四六判・238頁・**一葉社**・東京・202307刊・ISBN9784871960915

『なぜ谷は「ヤ」とよむのか ―鳥取の地名研究』●古屋修二 著



地名において「谷」という漢字の読みは、しばしば話題に上るところです。西日本では「たに」、東日本では「や」と読むことが多いというのはご存じの方もいるのではないでしょうか。しかし「谷」にまつわる地名はそんなに簡単ではないのです。本書は言語学・歴史学・民俗学・文学そしてもちろん地理学と様々な視点からそんな「谷」地名に迫ります。そもそも「谷」の読み方も、「たに」と「や」だけではありません。関東西部では「やと」、房総半島南部や鎌倉では「やつ」、房総九十九里には「さく」、北陸・山陰・南九州・沖縄では「たん」と実は非常に多様です。著者は方言の地域差によって音が変化しているのではないか？土地の性格によって名づけが異なっているのではないか？といろいろな視点からその違いに迫っていきます。一方で谷地・谷内などと書いて「やち」と読む地名が東北地方に広く存在しますが、これが関東の「やと」・「やつ」と相互に変化したものかと思いきや、そもそも「やち」は開けた低湿地で「やと」・「やつ」は谷状の地形と指し示すものが異なるなど、似た音・文字ながら中身は別物だったりもします。

本書の副題は「鳥取の地名研究」となっており、たたら製鉄と関連付けた解説なども興味深いものですが、考察の対象は日本全国に及びます。きっと覚えのある地名も出てくるのではないでしょうか。ぜひお手に取り、奥深すぎる「谷」地名の世界を覗いてみてください。（副隊長）

◆ 2200円・Ｂ５判・317頁・**今井出版**・鳥取・202305刊・ISBN9784866113296

『台湾の近代化に貢献した日本人』●古川勝三 著

わが国は戦前、台湾を50年にわたって占領統治した。同様に韓国も統治したが、戦後の日台と日韓の関係はまったく違うものになっている。どうしてなのだろうか。

著者は1979年夏、文部科学省海外派遣教師に採用され、家族と共に台湾で３年を過ごした。赴任が決まった時、戦前の歴史を考え、躊躇うところがあった。ところが、台湾人の親切さに触れ、台湾人が大正期に台南に巨大ダムを建設して不毛の地を緑野に変えた日本人技師八田與一の銅像を建立し、命日には墓前祭まで行っていることを知って世界観が一変する。改めて台湾史を勉強し、統治時代における日本人の役割を調べ始める。教育制度の礎を創った伊澤修二、風土病を駆逐した濱野弥四郎、国際貿易港を造った川上浩二郎と松本虎太、稲の品種改良をした磯永吉、全島に電気を灯した松本幹一郎、野球を広めた江口良三郎と近藤兵太郎、農業と漁業に貢献した移民たちなど、今も台湾で尊敬される日本人20人余を掘り起こした。

こうした施策の中心にいたのが後藤新平である。内務省衛生局長として1895年の領有と同時に渡台し、衛生環境の改善に手腕を振るった。やがて台湾総督の補佐役たる民政長官に抜擢されると、旧慣や現状を調査し、土地に則した統治・同化政策を具現化した。施行には多くの抵抗もあり、飴と鞭の使い分けが必要であったが、近代化のためのインフラを構築したことは確かである。（飯澤文夫）

◆ 1500円・Ａ５判・199頁・**創風社出版**・愛媛・202303刊・ISBN9784860373344

『本屋、ひらく』●本の雑誌編集部 編

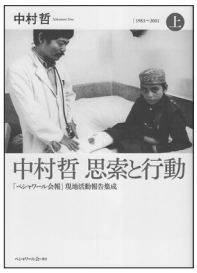
かつて本は特別なものではなく、また本屋もよくある街の風景のひとつだった。ところが今や書店がない市町村は全国で26.2％にも及び、店舗数は10年で3割も減ってしまった。そんな中で新しい本屋を開く人たちがいる。独立系書店と呼ばれ、小規模だが店主が気に入った本を扱い、魅力的な展示やトークイベントを開催し、ゆっくり本が読めるカフェスペースが併設されることもある。2021年でおよそ79店、2022年で50店もの開業があったとされる。その主だった理由として「意識の変化」「情報のオープン化」「仕入の多様化」の3つが挙げられるが、東北から九州まで、実際に本屋を開いた22人のリアルな声を聞けるのが本書。

開店のいきさつ、店名の由来、資金の集め方や物件探し、仕入方法や本屋という業態へにこだわりなどが熱く語られる。出版社や書店勤務経験者もいれば、全く異なる業界の出身者もいたり、開業のきっかけが旅だったり、冒険好きだったり、人との出会いだったりと当然ながら十人十色である。中には“日本のバイク文化に貢献できる本屋でありたい”といった珍しいコンセプトの店もあるし“世界で一番アンソロジーを売る”という店もある。

共通しているのは、それぞれの店主がそれぞれの人生を生きて本屋になり、直感と身体を使って本と人との出会いの場を作っていること。店主の“大切な一冊”も紹介。“本屋について知る”コラム4編もあり、開業ガイドとしても役立つ。（Y）

◆1700円・四六判・279頁・**本の雑誌社**・東京・202305刊・ISBN9784860114770

『中村哲　思索と行動 「ペシャワール会報」現地活動報告集成「上」１９８３～２００１』●中村哲 著



最初に、1983年中村哲のパキスタン赴任への壮行会の写真がある。その後の足跡を追ってみる。アフガニスタン東部ヌーリスタン州ワカの村民に歓迎を受け、ペシャワール・ミッション病院ハンセン病棟にて診療、ダラエヌール診療所、ワマ診療所、パキスタン北部の無医村への巡回、ラシュト村での屋外診療を行う。2000年春よりアフガニスタンを含む中央アジア一帯を襲った干ばつでダラエヌールの耕地を憂い、井戸の掘削作業を開始。2001年10月の米英空軍による空爆下、アフガニスタン東部ジャララバード近郷で緊急食糧配給を行う。中村哲はその思索と行動を、そのつど、ペシャワール会報で現地活動報告として述べている。

この書には第1号から70号まで収めてある。第46号では、子供の生死に直面する中村の、通常とは異なる死生観がみえる。『このワハン回廊の国境・ボローゴール峠に滞在中、ある家で十カ月の乳幼児が死亡した。乞われるままに私が診たときは、既に虫の息で、肺炎か粟粒結核の末期と思われた。正直に言おう。力は尽くす。だが、奇跡をあまり期待しないほうがよい。今夜か明日の朝までが峠だ。父親は「すべてはアッラー（神）の御心です。神の御心に私たちは逆らえません。」 私はせめて薬にシロップを一さじ与えた。すると、息たえだえの赤子が一瞬にっこりとほほ笑んだのである。それだけでみんな明るくなった。死にかけた赤子の一瞬の笑みに感謝する世界がある。シロップ一サジのささやかな治療の恵みに感謝する世界がある。』人は、水と食糧とエネルギーの確保が絶対必要不可欠だ。人命を救うためには、医療はもちろん大切だが、やはり水の開発が重要だと考える。

その後アフガニスタンの荒野に、灌漑用水路を施行し食糧生産の安定を図った。中村哲の真摯な精神力には、内村鑑三の生き方が貫いている。（古賀河川図書館　古賀邦雄）

◆2700円・A5判・430頁・**忘羊社**・福岡・202306刊・ISBN9784907902346

地方小出版 流通センター　ジャンル別 新刊案内

2023年5月1日～31日
流通センター着

※各ジャンル内での出版社名は所在地の北から南の順に並んでいます。

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

※当月は、ジャンル【総記・事典・辞書・出版】に該当する書籍はありません。

【雑誌】

◆Ｋａｐｐｏ　ｖｏｌ．１２４　２０２３年７月号　プレスアート編　298mm × 230mm　127頁　８００円　プレスアート［宮城］　978-4-503-22864-2　23/06

◆Ｓ－ｓｔｙｌｅ　７　ｖｏｌ．７０３　プレスアート編　280mm × 210mm　128頁　５００円　プレスアート［宮城］　978-4-503-22876-5　23/07

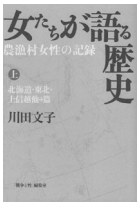
◆ＧＲＥＥＮ　ＲＥＰＯＲＴ　５２２　２０２３年６月号　廣瀬仁編　Ａ４　191頁　２８００円　地域環境ネット［埼玉］

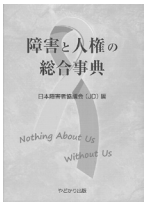
売行良好書

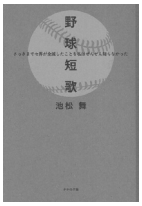
期間：2023年6月15日～7月14日
※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

［出荷センター扱い］

(1)『中村哲　思索と行動　「ペシャワール会報」現地活動報告集成「上」１９８３～２００１』2700円・忘羊社　(2)『食は薬なり』1200円・金壽堂出版　(3)『女たちが語る歴史　上　北海道・東北・上信越他篇』2200円・「戦争と性」編集室　(4)『障害と人権の総合事典』2700円・やどかり出版　(5)『野球短歌』1600円・ナナロク社　(6)『銭湯』1600円・書肆侃侃房　(7)『イチからわかるアイヌ先住権』1000円・かりん舎　(8)『オキナワノスタルジックストリート』2400円・ボーダーインク　(9)『堀田仁助』2000円・山陰中央新報社　(10)『日台万華鏡』1600円・書肆侃侃房　(11)『真珠』2200円・気争社　(12)『現代語訳　上井覚兼日記３』2200円・ヒムカ出版　(13)『食べて祀って』2000円・弦書房　(14)『記者のためのオープンデータ活用ハンドブック』700円・新聞通信調査会







［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］

(1)『イチからわかるアイヌ先住権』1000円・かりん舎　(2)『埼玉の妖怪』2000円・さきたま出版会　(3)『失われたアールヌーヴォー建築』1000円・リーブル出版　(4)『埼玉の戦争遺跡』1600円・まつやま書房　(5)『南極探見５００日』1400円・岩手日報社　(6)『ドキュメンタリーの現在』2000円・石風社　(7)『ジソウのお仕事　データ改訂版』1800円・フェミックス　(8)『文学する中央線沿線』1700円・ぶんしん出版　(9)『北海道いい旅研究室１９』818円・海豹舎　(10)『鹿児島県のカミキリムシ』3800円・南方新社　(11)『新課程 高等学校歴史教科書　歴史総合と沖縄』1500円・編集工房東洋企画　(12)『仁義ある戦い』1700円・忘羊社　(13)『沖縄の身近な植物図鑑』4500円・ボーダーインク　(14)『造船記』3500円・中国書店（集広舎）　(15)『自然農 栽培の手引き』2000円・南方新社　(16)『東松山の地名と歴史　復刻新版』1600円・まつやま書房

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

▼４月号のこの欄において、鳥取の定有堂書店の閉店をお伝えいたしましたが、今度は、名古屋の老舗、ちくさ正文館の閉店（７月末予定）をお伝えしなければならなくなりました。

当センター発足以来、取扱社の出版物に注目していただき、現在にいたるまで数多く仕入れをしていただいていました。1961年創業で、約120坪の店内に並ぶ６万冊の書籍は文学や哲学、歴史などの人文書が大半、一般のベストセラーランキングをあてにしない、店長・古田一晴氏の仕入眼は、研究者や文筆家にも一目置かれていました。閉店を伝える地元・中日新聞には「40年以上も通ってくれる人がいた」という古田さんの言葉が紹介されていました。

また、同記事には谷口正和社長の「専門書を届けるのが役割で『やっと見つけた』とお客さんが言ってくれるのが喜びだった。数ある書店の中から選んでくれてありがたかった」という言葉も掲載されていました。約20年前から売り上げが縮小、加えて建物の老朽化、諸経費の高騰、コロナ禍による来店客数減が追い打ちをかけ、閉店の判断に至ったとのことです。

中部地域では、今年に入って、有名書店の閉業が相次いでいる、と同記事では言及されています。１月には独自の棚づくりで人気を集めた七五書店（瑞穂区）が閉店し、６月には正文館書店本店（東区）が76年の歴史に幕を降ろしたとのことです。

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

honto
ネット通販で地方・小出版流通センター扱い
本がご購入いただけます。
honto.jp
hontoではお客様の読書スタイルにあわせて
電子書籍でも紙の本でもご購入でき、hontoポイントは
ネットでも書店でも使えて、貯められます。
地方・小出版流通センター扱いのご当地本もネットで
ご購入いただけます。
くわしくは honto.jp へアクセスください。